

展示・收藏品より

美を知る

288

県立博物館 (秋田市)

現在、当館の企画展「稲穂の詩〜秋田と米づくり〜」の中で、田んぼや池沼の生き物を紹介している。

田んぼは、稲作のために人が作り上げた人工的な環境で

田んぼの生き物

普通種が絶滅危惧種に

あるが、海や川、山と田んぼをそれぞれ行き来しながら、多くの生き物が餌場、休息の場、繁殖や産卵の場として田んぼを利用してきた。結果、田んぼは多様な生き物が集まるもう一つの「自然」となった。しかし今、メダカ、タガメ、ゲンゴロウ、ミズスマシなど、かつては田んぼや池沼で普通に見られた生き物たちが、環境省のレッドリストで絶滅危惧種に指定されている。

あるが、海や川、山と田んぼをそれぞれ行き来しながら、多くの生き物が餌場、休息の場、繁殖や産卵の場として田んぼを利用してきた。結果、田んぼは多様な生き物が集まるもう一つの「自然」となった。しかし今、メダカ、タガメ、ゲンゴロウ、ミズスマシなど、かつては田んぼや池沼で普通に見られた生き物たちが、環境省のレッドリストで絶滅危惧種に指定されている。

て知られるタガメ(写真①)は、1960年代以降急激に数を減らし、現在は環境省および本県のレッドリストで絶滅危惧Ⅱ類(VU)、つまり「絶滅の危険が増大している種」に指定されている。減少の主たる原因は、農業の散布開発による池沼の消失、そして乱獲などが推測され、タガメは現在「種の保存法(絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律)」により、販売目的の捕獲や譲渡は禁止されている。

田んぼで見られていた生き物の減少は、近代化に伴う米づくりの変化とも深く関わっている。湿田は乾田へと変わり、かつて1年を通して水が確保されていた環境が失われたことで、水生生物にとって厳しい環境になった。特に、幼虫の時期を田んぼの水環境に依存してきたアキアカネのようなトンボやタガメなどの水生昆虫は、稲作の過程にある「中干し」のタイミングまでに成虫にならなければ、幼虫のまま死滅し命をつなぐことができなくなってしまう。

稲作技術の進歩は、かつての「腐れ米の秋田県」を「米の名産地」へと押し上げた。生産性が向上した一方、環境の変化は、田んぼに生息していた生き物にとっては予想外に厳しいものとなっただろう。従来の水田稲作にライフサイクルを合わせて利用していた生き物も、半世紀余りの間の急速な変化に適応できないものは個体数の減少につながっているのかもしれない。

水生昆虫のゲンゴロウ(写真②)もまた、環境省のレッドリストで絶滅危惧Ⅱ類(VU)に指定されている。ゲンゴロウの仲間には、ケシゲンゴロウ(写真③)やチビゲンゴロウ(写真④)のように数ミ程度小さな種も存在しているが、身近に生息条件の良い池沼がなければわれわれがその存在を知る機会もない。環境省のレッドリストに掲載されているゲンゴロウの仲間には、先のケシゲンゴロウの他、キベリクロヒメゲンゴロウ(写真⑤)、マルガタゲンゴロウ(写真⑥)のよう、本県のレッドリストで指定されていない種もある。このことは、彼らが生息できる環境が秋田にはまだ残されているとも解釈できるだろう。



①タガメ (実物大) ②ゲンゴロウ (実物大)
③ケシゲンゴロウ (体長約4mm) ④チビゲンゴロウ (体長約2mm)
⑤キベリクロヒメゲンゴロウ (体長約8mm)
⑥マルガタゲンゴロウ (体長約13mm)
※③、⑤は環境省のレッドリストで、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある準絶滅危惧 (NT) 種

■**メモ** 秋田の米づくりの歩みと現在を紹介する企画展「稲穂の詩(うた)〜秋田と米づくり〜」は12月1日まで。田んぼにすむ生き物の標本や剥製を展示しているほか、古代から現代までの稲作の歩みを解説。石川理紀之助、高橋正作ら本県農業の発展に尽力した偉人の関連資料も展示している。開館時間は午前9時半〜4時。観覧無料。月曜休館。県立博物館 ☎018・873・4121

中由美 (県立博物館学芸主事・藤)